



① 日米安保は大事だと思う人ほど日米地位協定にもっと関心を持ってほしいと思う。7年前に前泊博盛『本当は憲法よりも大事な「日米地位協定入門」』（創元社）を読んでその思いを強くし、今年はその山本孝子『日米地位協定』（中公新書）が石橋湛山賞を受賞してそれは確信に変わった。そしてダメ押しは近刊の平良隆久『まんがでわかる日米地位協定』（小学館、1870円）だ。全体の4割を占める漫画は高校生が自由研究で日米地位協定を調べるという趣向だが、残る文章部分が予想以上に充実している。

ドイツ、イタリヤ、韓国が米国と頑張つて交渉のうえ確保した管制権や平時における指揮権に比べ、日本だけが世界で唯一、地位協定によって米軍の思うままになっている国であることをはじめ、国民の多くはまだ知らないだろう事実がたくさん書かれている。沖縄の苦難は想像に余りあるが、首都圏の空（米軍が支配する横田空域）もひどい。こんな無茶な日米地位協定を放置すれば、いずれ反米感情が急拡大してしまふのではないか。それが冒頭の謂である。

② 現憲法は米国に押し付けられたものだという意見は今も根強くある。だがそう単純なものではないことが中路啓太『ゴ・ホーム・クイックリー』（文春文庫、968円）を読み進むとわかつてくる。内閣法制局の佐藤達夫を主人

公に、政治家や官僚がGHQとやりあいながら憲法文案を作り上げていった過程が克明に描かれる。ノンフィクションとはいえ細かな用語や法律論が延々と登場してくるので少し飽きる人もいるかもしれないが、現実はそれだけ厳しく知力や腕力を要したのだ。とくに翻訳つまり日本語の機微とGHQとの駆け引きは本書最大の読みどころである。書名の英語は吉田茂が好んだ冗談でGHQと関係があるのだが、さて。

③ 副題「普通の人がなぜ過激化するのか」のついた大治朋子『歪んだ正義』（毎日新聞出版、1760円）は、中東を主な舞台とするテロリストたちの心理と論理を追究した力作である。そこでわかってきたのは、どんな人でも過激化しテロリストになりうるること、そして彼らの論

理は「自分は絶対に正しい」という思い込みだった。力で押さえつけるテロ対策には限界があることがよくわかる。日本の社会にも似たような現象が見出されること、ネット社会にも同じことが言えることに読者は愕然とするだろう。

④ 御巢鷹に墜落した日航機はボーイングの整備ミスのせいだったと誰もが思い込まされた。あれから35年。日航客室乗務員だった著者の執念の調査記録である青山透子『日航123便墜落の事実』（河出文庫、880円）が文庫化された。あえて行方不明を長引かせた謎、戦闘機2機の追尾、赤く見えた物体、散乱する機体の残骸や遺体を焼却しようとした不審な行為。驚くべき事実が明らかになっていく。このまま闇に葬らせ続けていいのだろうか。（浅野純次）